水天宮 御祭事暦

水天宮では、左記の御祭を斎行し 国の平安、ご参拝の皆様のお幸せ
ご健康をお祈り致しております。

【毎月】
月次祭（つきなみさい）……一日・五日・十五日。毎月定められた日に、神様へ日々の奉告と感謝を申し上げます。
戌の日……十二日に一度巡ってくる戌の日。安産を祈る参拝者で大変賑わいます。

【一月】
初水天宮……五日
火風神社祭……六日
【二月】
節分祭……三日
祈年祭……十七日
【三月】
高尾神社祭……四日
全日本災害復興祈願祭……十一日（午後二時四十六分より）
春季祖霊祭……春分の日
【五月】
例祭……五日
寶生辨財天（ほうしょうべんざいてん）例祭……第二巳の日

【六月】
夏越の大祓……三十日
【九月】
秋季祖霊祭……秋分の日
【十一月】
秋葉神社祭……十八日
新嘗祭……二十三日
【十二月】
納めの水天宮……五日
年越の大祓……三十一日

神様の前に人々が集い「真の心を以って」
お参りすることが大切です。

水天宮社務所　suitengu.or.jp

水天宮由緒記

水天宮のご祭神

天御中主大神（あめのみなかぬしのおおかみ）

誰もその形を知らない宇宙のはじまりに、高天原と呼ばれる天のもっとも高い所に現れた神様が、天御中主大神であります。

日本の神々の祖先神であり、安産、子授け等に広大無辺なご神徳をあらわされます。

安徳天皇（あんとくてんのう）

高倉天皇と建礼門院の皇子としてお生まれになり、三歳にして第八十一代天皇に即位されました。

寿永四（一一八五）年、八歳の砌（みぎり）、祖母の二位の尼に抱かれ、壇ノ浦にその身を海中に投げられました。

建礼門院（けんれいもんいん）

父清盛、母時子（二位の尼）の間にお生まれになり、十八歳で高倉天皇の中宮となられました。

建礼門院とは安徳天皇を生んでからの院号であり、壇ノ浦の合戦後、余生は平家一門の菩提を弔いました。

二位の尼（にいのあま）

平清盛の正室で、御名を時子と申されます。清盛の死後出家し、従二位に叙せられたので、二位の尼と呼ばれます。

孫の安徳天皇と京から西に逃れて、壇ノ浦にて入水されました。

「水天宮　安産御守」鈴の緒　御子守帯（みすこおびす）

皆様が社殿に向かってお参りをされる時に鈴を鳴らしますが、その鈴から下がる紐を鈴の緒と申します。神様との架け橋とも言える鈴の緒ですが、私共には特別な思いがございます。

水天宮が江戸時代に久留米藩上屋敷内に鎮座していた頃より鈴の緒には晒木綿が使われておりました。月に一度その晒を交換しますが、当時そのお下がりを受けられた方が腹帯としてお使いになったところ、殊の外安産であったことから、たちまちその御評判が人づてに広まりました。

上屋敷の塀越しに参拝される方々の様子をご覧になった殿様の計らいにより、毎月五日に限り門を開いて、爾来鈴の緒のお下がりとして晒をお分かちして参りました。

現在も、母子共に神様の御加護を頂いて健やかにお産を迎えて頂くために「戌の日」を佳き日と定めて、早朝に御祈祷した当時のままの生成の晒をお分かちしております。

お腹の中の大切なお子様は、神様から確かにお預かり致しましたというお気持ちと、一人の女性から母となる決意を受け、私共は鈴の緒を「御子守帯」と名付け、一体々々心を籠めてお分かち申し上げております。

水天宮の由来

赤松家を祖とする摂津有馬家は、応仁の乱の引き金となった嘉吉（かきつ）の乱の後に有馬の郷（現神戸市北区）に落ち延びて隠れ住み、その土地から姓を取って有馬と名乗りました。後年、太閤秀吉に見出されて中央に戻してもらいました。その幸運を授けて下さった有馬（有間）神社のご祭神である天御中主大神のご神徳を代々忘れぬよう、有馬神社の社紋である三つ巴を有馬家の家紋としました。現在でも、当主にのみ三つ巴の紋を付けることが許されております。

大名家としての有馬家は、元和六年（一六二〇）に久留米藩二十二万石を拝領し、当時は尼御前大明神と尊称されていた水天宮に対して、第二代藩主有馬忠頼公は、城下の筑後川に臨む広大な土地を寄進し、社殿を造営致しました。

敬神の念は代々の当主に受け継がれ、参勤交代の折に江戸で水天宮を親しくお参りできるように第九代藩主有馬頼徳公は、文政元年（一八一八）芝赤羽根橋の上屋敷内へ国元久留米より御分霊を勧請致しました。爾来、水天宮は当主と共にあり、明治四年には青山、翌五年には日本橋蛎殻町へと移転致しました。関東大震災をはじめ数多の苦難を乗り越え、現在に至っております。

情け有馬の水天宮

～深い温情～

文政元年、久留米藩有馬家上屋敷内に祀られていた水天宮は、人々の信仰が篤く、塀越しにお賽銭を投げる人が後を絶たちませんでした。時の藩主は毎月五日に限り、お屋敷の門を開き、人々のお参りを許しました。

そのことから有馬家と「情け深い」ことを掛けて、「なさけありまの水天宮」という洒落が江戸っ子たちの流行語となりました。

湯も水も火の見も有馬の名が高し

～日本一と称された火の見櫓～

幕府により大名火消しを命ぜられた第八代藩主有馬頼貴公は当時としては異例の高さである三丈（約九メートル）にも及ぶ火の見櫓を組みました。

これが江戸の町で評判になり、有馬温泉・水天宮・火の見櫓を掛けて「湯も水も火の見も有馬の名が高し」という言葉がうまれました。